

「三途の川」を渡る橋

作家でドイツ文学者の中野京子氏は、北海道新聞に「橋をめぐる物語」を連載しておられますが、その中で、「死者専用の橋」について書かれた一文（平成25年12月27日付）を興味深く読ませていただきました。

「死者専用の橋」とは、三途の川に架かる橋の事です。

この世とあの世との境に流れる川を三途の川といいます。この川に死者専用の橋が架かっているのは、日本だけではありません。

中野氏の紹介するところによると、

- ・ゾロアスター教におけるチャンバット橋（審判者の橋）は、罪の大小によって幅が広くなったり狭まったりと伸縮自在の橋だそうです。
- ・マホメット教におけるアル・シラト橋（細長い橋）は、剣のごとくに尖り、両側は茨の棘で覆われているのだそうです。そんなところに落ちたら大変です。

この他にも、ネイティブ・アメリカンのヒューロン族には死の川に架かる丸太橋、マレーシアには巨大な鉄鍋に架かる橋といった様に、地球上には死の川に架かる様々な橋についていい伝えが残されています。いずれも、人間の逞しい想像力の賜物ですが、そこに共通しているのは、悪人には渡る事が難しく、橋から転げ落ちた先には地獄が待っているという事です。

この世とあの世は大きな川で隔てられており、その川を渡って無事にあの世に行く事が出来るかどうかは、生きている間の行いによるというのは、民族や宗教を超え万古不易の原理の様です。

さて、日本での三途の川の渡り方はどうなっているのでしょうか。

この世とあの世を隔てる川を渡るには、三つの途があるとされています。それで、この川の事を三途の川というのですが、まず、善人は橋を歩いて渡ることが出来ます。小悪人は、浅瀬を渡ることが出来ます。しかし、大悪人は深瀬を渡らなければなりません。しかも、川の流れは速く、山のように高い波にもみくちゃにされ、川上から流れてくる岩石で体は打ち砕かれてしまうという様に、誠に凄まじい地獄図絵です。

土佐光信作の「十王図」には、馬に乗って橋を渡ろうとしている善人と鬼によって川に投げ込まれ、地獄の苦しみにもがき苦しむ悪人達の姿がおどろおどろしく描

かれています。そんな地獄には誰も落ちたいとは思わないでしょうから、地獄の話
を空想の世界と遠ざけるのではなく、むしろ、幼い頃からそうした地獄の話を語っ
て聞かせ、絵を見せたりする事も大事な事ではないかと思います。

さて、三途の川は人間の想像の産物といいましたが、

- 千葉県長生郡長南町を流れる三途川
- 宮城県刈田郡蔵王町を流れる三途川
- 青森県恐山を流れる三途川

という様に、実際に三途の川と伝えられている川があり、しかも、地図には三途川
と表記されています。私は、それらの川に行った事はありませんし、無事に渡れる
かどうか自信がありませんので行く気はしませんが、その川には三途の川と思わせ
るだけの妖気？が漂っているのかも知れません。

ところで、中野氏は、善人が三途の川に架かる美しい橋を渡る時、川の中の地獄
の様子をどの様に眺めただろうかと疑問を呈しています。本当の善人なら地獄に落
ちた人を気の毒に思い、自分だけ良い思いをするのに気が引けて、前に進めないか
も知れませんし、逆に、チョットでもザマミロと思った瞬間に、地獄の川にどぶん
と落ちるかも知れません。だから、出来ればその様な地獄図は見たくはなし、見え
ないで欲しいという訳です。

人は、生きている間も、死んでからも試され続けなければならないのかも知れま
せん。いやはや、あの世に行くのも、決して楽ではありません。(塾頭：吉田 洋一)